

シリーズ 中学校武道

授業の充実に向けて

149

つまずきをどう克服したか (42) (コロナ禍で種目をなぎなたに変更した武道授業)

大阪市立墨江丘中学校教諭 橋口 徳治

大阪市の南部に位置する墨江丘中学校（全校生徒482名）は、市内では中規模の学校である。令和2年度は新型コロナウイルスの感染拡大で、本校も4月に休校を余儀なくされ、予定していた柔道の武道授業も全面的に中止になった。このため授業再開後の武道授業は、接触の少ない「なぎなた」に変更し、生徒からも好評を得た。コロナ禍の中で授業をどのように考え、展開したのかを紹介する。

1 令和2年度における本校の状況

令和2（2020）年4月、新型コロナウイルスの感染拡大で全国の学校が一斉休校となった。本校でも保健体育科のみならず、すべての教員はこの先、授業を進められるのか、学校行事はどのようになれるのか、生徒の学びを保証するため何が必要なのか、ということは何度も試行錯誤し、意見を出し合った。

感染症対策として政府などから

日々出される情報を念頭に、ソーシャルディスタンス、マスクの着用、屋内外での活動制限などについての対応を迫られた。

そのような中、学校の教科会議の議論で、「生徒の安全・命を守ることに、これ以上大切なことはない。ただそれと同時に私たちが教育者として子どもたちに『生きる力』を身につけさせること、目標を立てて努力することの素晴らしさや悔しさを身につけさせることは使命であり責任である」という意見を聞き、コロナ禍でも前を向いて「何かできることはないか」と知恵を絞った。

2 柔道からなぎなたへ

6月から感染リスクが低く、優先度の高い教育活動から徐々に再開。保健体育科では、安心・安全でリスクの少ない種目からスタートすることとなった。本校の武道授業は毎年、男女ともに1年生で柔道を選択していたが、寝技・立ち技といった授業展開では飛沫感染のリスクが高いことから、種目の変更や実施時期を見直すことにした。

教科会議の中で林憲治郎校長から新たな種目として「なぎなたはどうか？」との提案があった。しかし、なぎなたの経験がある体育科教員はいなかった。

そこで学校長を通じて、全日本なぎなた連盟に協力を依頼。常務理事の今浦千信先生に、本校の体育科教員への事前研修会、授業での支援をもらえることとなった。

なぎなた授業の実施にあたって

3 授業内容

カリキュラム作成の際には、各武道の指導に共通している「礼に始まり、礼に終わる」という「礼法」や、自己の責任を果たし、互いを尊重し、高め合える心の育成、そして何よりも今回、コロナ対策ガイドラインに沿った安心・安全な授業づくりを行った。

▼導入
最初に、授業の中でなぎなたの特性について指導を行った。
なぎなたは正しい間合（距離）

図1 【なぎなた授業の展開】 令和2年10月後半から12月前半まで、1年生男女を対象に全9時間を実施

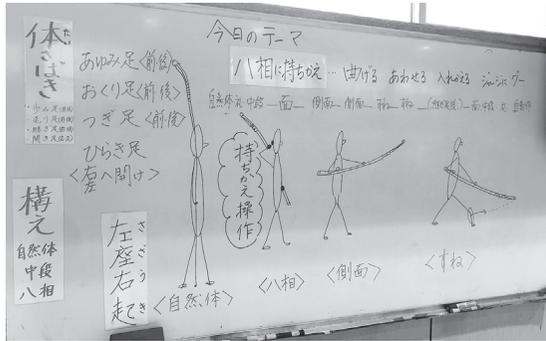
1時間目	なぎなたに触れる・中段の構え・体さばき・面打ち
2時間目	中段の構え・体さばき・面打ち
3時間目	八相の構え・打ち返し技
4時間目	八相の構え・連続技
5時間目	連続技からの受け お互いの気持ちを察して理解する
6時間目	連続技の練習（打ち返し練習） お互いの気持ちを察して理解する
7時間目	打ち返し選手権大会練習 【評価方法の説明】 審判法 お互いの気持ちを察して理解する
8時間目	打ち返し選手権大会
9時間目	打ち返し発表会（実技テスト）



外部講師（左）の協力を得ながら授業が進められた



すね打ちの練習をする生徒たち



授業のポイントを書き出したホワイトボード

生徒たちは、呼び出し係・記録係・審判係に分かれ、競技をしないグループはそれぞれに運営側に徹し、「見る」「支える」体験ができた。係の仕事には責任を持ち、他の審判判定に左右されず正々堂々とジャッジする姿が印象的であった。競技をするグループも学習した技を堂々と発表した。

授業では、最初できなかったことが「できる」喜びやペアでの学びで互いにタイミングを合せる動き・リズム感を学習し、生徒が夢

<面打ち>
「面を打て」の号令

- 右足を踏み込む。なぎなたを頭上（体の中心）に振り上げる。
※ 体の中心に上げる。左右にぶれない、揺がない。
- 左足を踏み込む。なぎなたを上（体の中心）から振り下ろす。
※ 振り下ろしたとき、身体につけたまま。
右手はおへその前 左手は軽く握り伸ばす。体は横向き。
切先は相手の頭の高さ。
※ 発声は打つ瞬間に「面」

※ 後ろに進むときはその逆

<号令>
「着座」 試合前、練習前 腰膝筋を曲げる 4を大切に 敬意をもって
「お互いに礼」 ・・・ 自然体から左足を1歩出して、中段の構え
「中段の構え」 ・・・ 自然体から左足を1歩出して、中段の構え
→ 体さばき各種 号令をかける
「なおれ」 ・・・ 左足を右足にそろえる（左足を引く）

<授業の流れ>
挨拶、号令、点呼。
本時の説明（武道としてのなぎなた、体さばき、面打ち）
左座右起について → 礼
なぎなたとは（簡単に） 長さ、重さ、連盟DVD見る
なぎなたの取り方説明、取りに行く。 体操隊形に開く（回す、上で回す。お互いの距離の確認）
自然体について（簡単に回せる手の位置がなぎなたを持つ位置、切先を置く位置）
中段の構え（右の構え：右手足の付け根につける、手幅・足幅・肩幅だいたい同じ）
体さばき（号令をかけて動く）
面の打ち方説明 号令をかけて面を打つ
〔2人組（向かい合って）、グループで円になって（真ん中にコーンを置く）〕
集合、まとめ

なぎなた① なぎなたに触れる・中段の構え・体さばき・面打ち

<なぎなたについて>
なぎなた → 2m10cm～2m25cm、650g以上
武道 「礼に始まり礼に終わる」→ 相手への敬意、尊重
「左座右起」 → 左から座り右から起立する。

<構え>
自然体 → なぎなたを持って自然に立った姿で、最も安定した姿勢。
右手で腰の位置になぎなたを、右足小指の横に切先をつける。
※なぎなたを握って、腰に当てる位置が中心。
中段 → 基本的な構え、攻撃にも防脚にも転じやすい。
※足幅、手幅、肩幅ほぼ同じ広さ。右手を足の付け根につけ、左手は軽く持つ程度。
八相 → 手を前足側の膝や、もう一方の手を後ろ足側の耳の横に置き、なぎなたを立てて構える
もつとも攻撃的な構えであり、試合等でも採用される。
中段からの持ち替え → 立てる、右手をスライドして、右手と左手を交差して持ち替える。
※右手は耳の横、左手は足の付け根。

<体さばき>
歩み足 前・後 → クロスステップ
送り足 前・後 → すり足
横足 前・後 → ギャロップステップ
開き足 → 右へ開け、左へ開け

図2 なぎなたノート

中になる授業を行うことができ、さらに担当教師自身も授業で映したビデオを繰り返し見て動きを確認し、指導について工夫した。

今回のなぎなた授業では生徒同様、教員にも新しい種目への挑戦と発見があった。コロナ禍の収束が見えない中では、教員自身で指導できることが重要である。そのため、1時間目は授業協力者が授業を行い、教員はビデオを撮りながら授業に参加。放課後に何度もビデオで内容を確認した。2時間目は教員が授業を行い、授業協力者は安全管理のため生徒の間に入って授業をサポート。終了後に協力者からアドバイスを受け、技能面の向上に努めた。3時間目は教員自身で工夫しながら授業を進めた。また、他の体育科教員もできる限り授業に参加した。

また、男女共習で授業を展開できたことも大きな成果だった。10月に体育科教員全員で「なぎなた研修会」を実施した。特に「持ち替え操作」の授業中の生徒のつまづきについて、どのようにサポートしていくか検討を重ねた。その

をとって相手の心を感じ、自ら考ええる武道である。また、なんといっても長さ2・1と2・25の器具をもって攻防をすることや左右対称の動きが特徴である。その動きは前後左右と多種多様なため、楽しいだけではなく安全管理や互いを尊重する態度の育成、心の学びへと繋がっていると感じた。

特に間合の学びでは、周囲との距離感や空間認知力を身につけることが大事であり、これがコロナ対策のソーシャルディスタンスにも通ずることを生徒に説明した。

新型コロナウイルスの観点からも、自分と相手との距離感が日常生活でも大切であること、学校生活で間合をとることが大切であることを、武道授業を通して指導した。

▼なぎなたノートの作成
授業の展開は、今浦千信先生から助言をいただき、体育科教員が本校独自の生徒用なぎなたノートを作成した。（図2）

このノートにより、生徒が約束事などの共通理解を行うことがで

中でのなぎなたは「間合」を理解すれば男女同時に学習できることに気づいた。その後の男子クラスでは男性教員が授業担当を行ったが、体育科教員間では男女問わずサポートをすることができた。このように新しい種目への挑戦は教師側にとっても学ぶことが多くあった。

今後の学年別発展段階として、3年目にはダンス領域ともリンクさせ「リズムなぎなた」で集団演武ができるようまで進めていくことが目標である。

▼生徒からの感想
・「最初はできるか不安だったが、なぎなたの意味も分かっていたし、なぎなたの動きも分かっていかなかったけれど、やってみると楽しいし、一つ一つの動きができて嬉しかった。2人組での動きも成功すると達成感があって練習して良かったと思った。やりがいのある競技だと思った」
・「授業を行うたびに楽しくなってきた、もっとなぎなたをやってみたいと思うようになった。なぎなたのことは知らなかったし、興

きた。また何度も振り返りができるため、武道の本質の一つである「繰り返し同じ動きを丁寧に行い、心身ともに磨く」という考え方も同時に指導することができた。これは基礎の徹底につながり、武道だけでなく物事の捉え方の軸となるため、重要な点であると言える。

▼授業展開の例
全9時間の授業を実施したが、生徒が経験したことがない武道の授業であったことから、技術の習得と同時に、なぎなたの楽しさを生徒にどのように伝えるのかについて工夫した。基礎的な技術を習得したあと、ペアでの打ち返し学習を多く取り入れた。互いの息を合わせ、間合を大切にすることで、武道特有の「心を合わせる学習」を行い、互いを尊重しながら楽しさを感じる事ができるようにした。

また、8時間目には、互いの間合や気持ち察して理解し合うために、動きを評価し合う「なぎなた打ち返し選手権」を行った。生



「なぎなた打ち返し選手権」で対戦する生徒たち（写真右）。判定も生徒自が行った（同左）

味もなかったけど、授業を受けて奥が深く「礼」の一つ一つにも意味があるなど、普段気にしていないことの意味を知るきっかけにもなった」

4 授業での気づきと今後の課題

▼なぎなた授業での気づき

なぎなたの授業を実施して気づいたことがある。部活動や幼少期からの運動経験がある野球やサッカー、バスケットボールなどの単元では、運動の「得意・不得意」がはっきりと分かれることが多い。しかし、なぎなたは、全員が初めてでの体験であり、普段の体育で苦手意識のある生徒が臆することなくなぎなたに取り組む姿勢が多く見られた。この点は教師側にとっても新しい種目での気づきや発見につながり、多くの生徒が楽しんで取り組める種目であると感じた。

▼今後の課題

今回、急なカリキュラム変更を余儀なくされた中で、一番苦労したのは道具を揃えることである。

なぎなたを実施している高校や連盟の協力もあり、実現できたが、今後も続けていくには計画的に取り組む必要がある。

また、なぎなた経験者、指導できる教員の育成、確保も同時に課題となる。コロナ禍での武道教育を行うため、令和3年度には、大阪府中学校保健体育科教育研究会（加盟29校）において、本校でのなぎなた授業の発表、研究協議と教員実技指導を行う予定である。

5 終わりに

本校では授業担当者の経験と教材研究により「柔道」を選択してきたが、コロナ禍を機に「学び方」や「学ぶ内容」を教員が深く考え、

以前に増して共通理解が図れるきっかけとなったことは非常に良かったと感じている。

学校現場では今、毎日の清掃、消毒が当たり前となっている。そうした中で学校教育の在り方、学び方の変化、個々に応じた最適な学習方法を模索し続けなければならぬ。今回、一時立ち止まったが、つまづいたりした経験もあったが、種目を変更しても教える本質を逸脱することなく、教育内容をさらに発展することができたことは大きな経験となった。

世間では、人工知能（AI）、アクティブラーニング、オンライン教育などが注目されているが、どんなに時代が変わっても「変わらない」ものを大切にしながら、合理的で有効なものをうまく組み合わせるべく知恵が必要ではないだろうか。

武道指導の中では、伝統や歴史、文化、「道」の考えなどは、これからの必要な教えとして残されていくべきものだと感じている。

相手と相対し空気が気配を感じ取る武道の特性を保健体育科教育の中で生徒たちに伝えていきたいと思う。